

# 見えない宇宙を共有する

## ～「星の語り部」の活動～

高橋真理子(山梨県立科学館)、星の語り部

「星の語り部」は、山梨県立科学館のプラネタリウムに集って、老若男女がさまざまな表現活動を行っている市民グループです。星の下で集い、障害の有無問わず、いろいろな人を受け入れることのできる受容の空気に満ちた集まりになっています。そこには、「星」「表現」というキーワードが潜んでいるようです。星を見上げる視点を共有し、互いに表現しあったり誰かに伝えることで、一人ひとりが生かされる、そんな星の語り部の日常を紹介します。

### 1. 実践対象

「星の語り部」自体には、小学生から70代ぐらいまでの人が、全世代にわたって参加しています。また、視覚障害者、自閉症者も参加しています。この集まりの特徴の一つは、もともと天文に詳しい人がほとんどおらず、活動をしているうちに、星を見上げる意味を日常にしみこませてきた、という点があげられます。語り部自体が、実践者であり、実践対象者でもあるといえるかもしれません。語り部が何か作品をつくったり、パフォーマンスする対象もやはり、老若男女、障害の有無問わず、多くの人に、また星から遠い人たちに星を見上げる意味を届けたいという思いで活動しています。

### 2. 実践可能な場所、必要な道具や準備

科学館のプラネタリウムが主な活動場所となっていますが、やっている内容によっては、街中のカフェ、駅前、ライブハウス、病院、何かのイベント会場など、その範囲は多岐にわたっています。科学館以外で企画をやる場合、移動型のプラネタリウムやMITAKAが動くPCやプロジェクターがあると有効ですが、これらがなくても活動しているケースもあります。移動型プラネタリウムについては、家庭用プラネタリウム(ホームスター)を使う場合もあり、また、ウィルシステムデザインが開発した「スターライトドリーム」をPCで動かして、プロジェクターで映し出すこともあります。駅前観望会の際には、小型望遠鏡を用意します。

### 3. 実践例

#### 3.1. プラネタリウム・ワークショップ

この章以降に書く実践例と違うのは、これは、科学館が主催する企画であるという点です。ですが、一番最初のプラネタリウム・ワークショップ(2004年1～3月に実施)は、「星の語り部」が立ち上がるきっかけをつくった企画でした。当初、「大人のためのクラブ活動～プラネタリウム・ワークショップ」というタイトル、また「見ているだけじゃもったいない、もっと使おうプラネタリウム」というキャッチコピーで、プラネタリウムという空間で自己表現してみるワークショップを行いました。映像と語りを組み合わせた“作品”が生まれ、その後、企画からはじめる作品作りをしないか、と声をかけたところ、20名のうち5名が名乗りをあげて、その年の夏に投影する作品づくりを始めたのが、「星の語り部」のはじまりになります。その後、毎年同じ時期(1～3月)にプラネタリウム・ワークショップは行っており、そのテーマは、「プランニングワークショップ」「星の言葉を読み解く」(星空句会など、言葉で星空を表現する)、「星とサイエンスと詩」(宇宙連詩ワーク)、「イマジン星の世界」(鉄の楽器で宇宙をイメージする音をつくる)、「星×○=△?」(星とオルゴール、

星といろいろなモノを組み合わせ、星空を身近なものに、「星に託す手紙」、など、いずれにしても、ワークショップという、いわゆる参加体験型の学びの手法を使って、「参加者一人ひとりが主人公になり、相互作用を楽しみながら、発想を形にする」時間となっています。このワークショップは、毎年、星の語り部も参加する一方、このような活動を知らなかった人も参加するので、語り部には次の企画のヒントになるようなこと、また、新しく参加されて興味を持った方は、持続的な活動への誘いになるという位置づけになっています。



写真1 プラネタリウム・ワークショップの様子

### 3.2. 夏休みプラネタリウム番組(夕涼み投影)制作

上記のように、2004年夏に、一般市民が制作したものを来館者に観覧無料で見せるということを行って以来、毎年継続して制作が行われています。その作品数は、2010年夏時点で、13作品となりました。2004年当初は、画像と音楽のみのいわゆるスライドショーでしたが、視覚障害者のメンバーが仲間に入った時点で、作品の方向はだいぶ変わり、言葉を中心としたものとなり、また、年毎に、多才なメンバーが集まってくることで、企画・脚本・ナレーション・音楽・録音・合唱・絵などを、すべてメンバー自身の手によって制作するようになりました。この制作の中に、視覚障害者メンバーが入っているのは、とても大きな意味合いがあり、「見えない宇宙を共有する」ということが、おのずと、星の語り部作品の根底にあるテーマになってきたような気がします。これまで制作してきた作品のタイトルは、「星兎」、「宇宙で一番おいしいお菓子」、「月・イマジジン」、「星の雑貨屋さん」、「0点の宇宙旅行」など。これらを見てくださった方の感想は、後述しますが、年々、心に響く感想が増えているのは、語り部自身の進化の成果でもあると思います。

# 心の中の宇宙 言葉と音で

プラネタリウムで流れる音楽などの番組製作に、04年から毎年取り組む市民団体「星の語り部」。05年には視覚障害者4人が加わり、今夏は月をテーマに健常者と視覚障害者の壁を越えた作品「月・イマジン」を完成させた。30日までの金土日曜午後5時から県立科学館（甲府市）で披露されており、同団体は「宇宙の果てや星の大半は目で見えないイメージの世界。言葉を音で宇宙を感じてもらいたい」と話している。【小林悠太】

## 甲府の「星の語り部」市民団体

同団体は、04年に同館の員外にもプラネタリウムを楽しくてウムの製作体験教室を「もらおろ」と、国立天

プラネタリウムの番組製作

## 視覚障害者4人も参加



ら約30人が05年から、視覚障害者と番組製作している。今夏は、神奈川県鎌倉市に住むメンバーの音楽彫刻家、原田和男さんの「月」が作った金属楽器「シテロイホス」を利用。音階がない優しい音色が特徴で、プラネタリウムで流れる歌を収録する「星の語り部」メンバー。左から、田中さん（左）、田中さん（右）、田中さん（右）、田中さん（右）の北東公民館で。

## 立科学館「月・イマジン」週末上映

宇宙を想像させる広がりのある音が響く中、月との思い出や月から見た地球などを表した言葉をつむいでいく。全メンバーの返田順子さんは「言葉を通してつながることができるので壁を感じない」と述べ、子どもたちに星を見たいという全員の望みを実現した。50も50年間、無縁だった星がまた身近に感じられる。心の中の夜空を再び星が光っています。同館の入館料が必須。

写真2 新聞記事「心の中の宇宙 言葉と音で」

### 3.3. ユニバーサルデザイン絵本の制作

NPO法人ユニバーサルデザイン絵本センター[1]に、「星をテーマにしたものを一緒に作りませんか」と持ちかけて実現した企画です。2010年11月に完成しました。センター側としては、これまであまり思ってもみなかったテーマであること、また、星の語り部にとっては凸凹つきの絵本の制作のノウハウは持ち合わせていないこと、互いのメリットになりそう、ということで協働制作がはじまりました。これまでの番組制作以上に、侃々諤々と意見交換をしながら、一つの物語ができました。思いは、「みんなの上にも星があることに気づいて、大切なことを思いだそう」というもの。街の星、里の星、山の星、とページを繰るごとに、星がたくさん見えてくるのを、凸凹で表しています。また、その裏面には墨字だけの情報ではありますが、絵本に登場する星ならびについて、星までの距離について、また光害について・・・など、絵本の裏にひそんでいる事柄を解説しています。この絵本が完成し、山梨県立盲学校に寄贈しに行った際に、こちらの想像をはるか超えて生徒さんが喜んでくださり、科学館と盲学校のつながりもできました。その後、絵本を使った語り部パフォーマンスも実践しています。この絵本については、またあらためて「天文教育」などに報告したいと思います。



写真3 ユニバーサルデザイン絵本「ねえ おそらのあれ なあに？」

### 3.4. 語り部をつなぐ歌

語り部がゆるやかで、優しいつながりを持ってられるのは、常に歌とともにあるから、といっても過言ではないかもしれません。作詞・作曲が大好きなメンバーのおかげで、オリジナル曲がたくさんあります。今回のUD研究会で披露した歌は、「ほしのうた」と「満天の星」。「ほしのうた」は、2009年の世界天文年を記念して、アストロラジオから企画を持ちかけられ、曲は Deep Field さん、詞を語り部メンバー20人ほどがリレー形式でつくっていくという方法で制作しました。[2] その歌を、ライトダウン甲府バレーイベント、山梨学院大アルテア祭、甲府アートフェスタ、甲府大好き祭り、他、さまざまなステージで披露し、「みんなで星を見上げよう」というメッセージを多くの人たちに発信してきました。また、「満天の星」は、だいぶ昔に制作されたメンバーのオリジナル曲ですが、その内容が星の語り部にマッチしていて、私たちのテーマソングとなっています。それ以外にも、メンバー一人ひとりのために歌がつくられ、それをみんなで歌って誕生祝いをするというの、語り部の恒例行事になっています。



写真4 歌う星の語り部メンバーたち

### 3.5. 合宿

毎年の恒例行事の一つが合宿です。例年、川崎市立八ヶ岳少年自然の家を利用させていただいています。そこには、アストロハウス、という床暖房つき、自動導入できるクーデ式望遠鏡が4台備えられた素晴らしい施設があります。一晩中、満天の星を見ながら、そこで語ったり歌ったりしています。見えない仲間も、「わ！流れた！」という歓声とともに、流れ星の体験もしています。また通常は、語り部に参加していない、さまざまな分野のプロフェッショナルなども連れてきて、あらたな交流も楽しんでいます。星空を他者と共有することの喜びを体にしみこませるような活動と言えます。



写真5 望遠鏡で星を見る人々と、昇るオリオン座

### 3.6. サイエンスアゴラへの参加

毎年 11 月ごろに、日本科学未来館などを会場に行われる、サイエンスコミュニケーションのお祭り「サイエンスアゴラ」に、4年ほど続けて参加しています。2009 年は、1時間半の歌あり、クイズあり、番組あり、のオリジナルステージを行い、2010 年は、「こたつみにケーション」と題して、こたつに入りながら、プラネタリウムの星の下で語り合う場をつくりました。2009 年の総括セッションでは、星の語り部と、障害児の表現の場をつくってきて「山の都ふれあいコンサート」のメンバーたちあわせて 60 名ほどで、「星つむぎの歌」[3]を手話つきで大合唱しました。



写真6 ステージで「星つむぎの歌」

### 3.7. 院内学級でのプラネタリウム

2007年の天文教育普及研究会関東支部会をきっかけに、その年から毎年、山梨大学医学部附属病院の小児科病棟へ出かけています。プラネタリウム投影では、子ども達それぞれのお誕生日や星座に関連した星空をうつしたりします。また、月が登場する絵本を読んだり、また一緒に「ほしのうた」を歌ったりしました。ユニバーサルデザイン絵本ができてからは、病院内のクリスマス会で、その絵本を題材にしたパフォーマンスを披露しました。



写真7 院内学級でのプラネタリウムの様子

### 3.8. その他いろいろ

星の語り部は、最初のころは科学館における活動を主に行ってきましたが、ここ数年は、科学館の外にでての活動が増えています。街なかにおけるプラネタリウムカフェ、駅前観望会をはじめ、2010年には三鷹の小学校に呼ばれ「道徳講演会」の枠組みで「星がつなぐ☆みんなの心」というパフォーマンスを行ったり、岩手にある子育て支援 NPO とのコラボで「いのちと星のワークショップ」を行ったりもしました。外との連携によって、自分たち自身の活動はいくらでも広がっていきます。星を見上げる視点は、どんな分野においても、またどんな場面においても、どんな人にとっても、意味をもって深く浸透することができるのだと思います。

また、星の語り部の活動が、科学館の企画にも大きく影響し、プラネタリウム番組の副音声の制作[4]、字幕投影や手話つき投影への取り組みに向かわせたり、科学館のプラネタリウムフェスティバルでの一投影を担うことにつながっています。

### 4. 実践上役立つヒントや留意点

星の語り部の活動のポイントの一つに、日常的なコミュニケーションがあります。今日の星はきれいだね、とか、金星が明るいね、など他愛もないメールが行き交う中で、もともと天文から遠い人たちや、目の見えない人たちが、星を見上げる視点を日常にしみこませてきたというプロセスがあります。また、目が見えないメンバーが私たちの中にいることが、ユニバーサルデザイン絵本の出版などの企画に、おのずと向かわせてくれました。当然のことではあるのですが、さまざまな立場の人と共同作業をする、ともに表現活動をするという点が、おそらくユニバーサルデザインの実践には大切なのだらうと思います。また、これも当然のことではあるのですが、その活動を行うある一定の場と活動環境が保障されていることはかなり重要な点かと思えます。そして、企画などは、出会うべくして出会った方々と共に行うことをやっている、おのずと必要としてくれる人たちに会うことができるようにも思います。施設や病院なども押しかけていく構造ではなく、互いに共感できたときに企画ができる、という点が大切なのではないか、と思っています。

### 5. 実践例の評価

上記のように、多くの実践例を提示したので、すべてについて書くのは難しいのですが、プラネタリウム作品への感想、絵本への盲学校の生徒の感想、小学校での道徳講演会の生徒の感想を以下にあげます。

#### 5.1. プラネタリウム番組への感想

- ・作品の中に調和を感じ、とても温かい気分をいただきました。最後の唄までも……。とってもステキ！
- ・うちゅうはとっつっつっても広いと思った。
- ・5才の孫が、熱心に見ていました。又 見せたいと思います。
- ・制作した皆さんの熱意がとても強く感じられる作品でした。
- ・プラネタリウムで遠い宇宙まで見たのははじめてでした。私もいつか宇宙から地球を見ます。星に思いをよせると、日常のイライラやつかれは、本当は実にたわいないものなんだと思えます。またこの広大の宇宙の一部が自分でもあるという大きな思いも生まれます。ひごろ忘れがちな星や宇宙。つかれた時見上げてみたいです。
- ・宇宙は宇宙、自分は自分とっていたが、宇宙をしることは、自分を知ること 感動です。

## 5.2. UD絵本に対する盲学校での感想

- ・星がどんどん増えていって面白かった。
- ・学校で習う星は、難しいイメージしかなかったけど、実はとても身近で、今日はほんとうに星を見た気がして、いろいろ想像できました。
- ・点字も絵も触図もとてもわかりやすい。星の大きさも、いろいろあって分かりやすい。
- ・見えている人、見えてない人が一緒に読むことができるのはとても嬉しいです。ぜひ今後もつくってください。



写真8 新聞記事「星テーマに製作 点字絵本を寄贈」

## 5.3. 小学校の道徳講演会での感想

- ・目がみえなくても星は感じられるっていいですね。(3年生)
- ・ぼくは星をみるためのおまじない「ほしをみせてほしー」にはわらっちゃいました。(4年生)
- ・私はみなさんにあうまで、まったく星に興味がありませんでした。でも歌をきいたり、宇宙をみせてもらってからは、星が大好きになりました。(5年生)
- ・市民と科学は、つながるのですね。それを実践しているみなさんがいることに驚きました。(地域の方)

## 6. 一般市民への天文学教育普及活動へのフィードバック

星の語り部のメンバーは「天文普及」をしているという意識をほとんど持っておらず、まずは自分たちが楽しいこと、そして、星を見上げる視点をもつことで自分たちが変わってきたこと、それをもっと多くの人たちと共有したい、という想いで活動しています。このプロセスは、実に多くの一般市民に実践できることなのではないか、と感じます。星を見上げた記憶や星をみてほっとしたという経験、誰かと想いを結んだ経験・・・それは、ほとんどの人たちの中にありますが、実際の星がどんどん見えなくなる現代において、それらを忘れてしまう人が多いと感じます。けれどもそれはまだ思い出せるレベルの意識下にあるのではないかと。星の語り部の活動は、そこに歌や絵本や作品があることで、多くの人々の意識下にあるものを、思い出させてくれたり、物理的に星空から遠い人たちにあらためて星空を思うことの素敵さに気づいてもらう活動なのだろうと思います。それに気づくことができれば、あとは一人ひとりの好奇心に応じて、科学館のようなところがそれを深める体験の機会をつくったり、さらに知りたい思いに応えられればよいのかな、と思っています。

## 7. UD研究会のその後

2010年6月に行われたUD研究会からすでに半年以上がたっていました。その研究会でいろいろな方に出会えたおかげで、この半年以内にまたいろいろと新しい取り組みをすることができました。一つは、これまで見えない人が共に楽しむ・・・という実践は行っていたのですが、聴こえない人と共に・・・という実践がなかったところ、研究会で発表されていた竜のおとし子星の会の飯塚さんの天文手話を拝見し、手話が大変クリエイティブなことに感動し、2011年1月のプラネタリウム・ワークショップでお呼びして「いろいろな人と星でコミュニケーション！」を行うことができました。県内のろう者の方が、「これまで行っても情報がないので、星だけ見ても面白くないと思って足がむかなかったけど、今回はチャンスと思った」と、10人以上も詰めかけてくださり、そのニーズを実感しました。今後、プラネタリウムにおける手話つき投影、字幕つき投影も定期的に行えるようにしたいと思っています。また、静岡大の祓川さんとお会いして、ドーム映像「HAYABUSA」の副音声をいただき、県内の視覚障害者の方に楽しんでいただくことができ、字幕ももうまもなく実現可能となります。星の語り部に興味あり、ということでお仲間になってくださった方もいたり、UD絵本をさらに、多くの当事者に届けるアドバイスをくださった方もいたり、さらに人の輪が広がっています。

今後も、自分たちのペースの中で、ゆるやかなネットワークを広げ、星を見上げることを共有できる社会に少しでも貢献できれば、と思っています。

## 8. 参考文献・URL

[1] NPO法人ユニバーサルデザイン絵本センター

点字と触図のついた絵本をこれまでに16冊発行しているNPO法人。

<http://www.ud-ehon.net/>

[2] ほしのうた

「ほしのうた」は、カガクトビラプロジェクトと星の語り部の協働作業でできあがった歌。ウェブサイトから歌詞や楽譜、楽曲がダウンロードできる。 <http://hoshinouta.livedoor.biz/>

[3] 星つむぎの歌

山梨県立科学館中心となって「みんなで星をみあげ、その想いを言葉にしてつなぎ、歌をつくろう」と呼びかけてできた歌。監修、選定、補作に覚和歌子、作曲に財津和夫、歌は平原綾香が歌う。2008年3月のS

TS-123ミッションに乗り込んだ土井隆雄宇宙飛行士(甲府市立東中学校出身)への応援歌でもあり、そのミッションで、ウェイクアップコールとして宇宙に流れた曲でもある。

<http://www.sannichi.co.jp/space-poem/>

[4] 高橋真理子・跡部浩一「見えない宇宙だからこそ～プラネタリウム番組副音声と解説用星の点図の試み～」天文教育 vol.19, No.5, 2007

星の語り部のウェブサイト <http://hoshinokataribe.main.jp/>